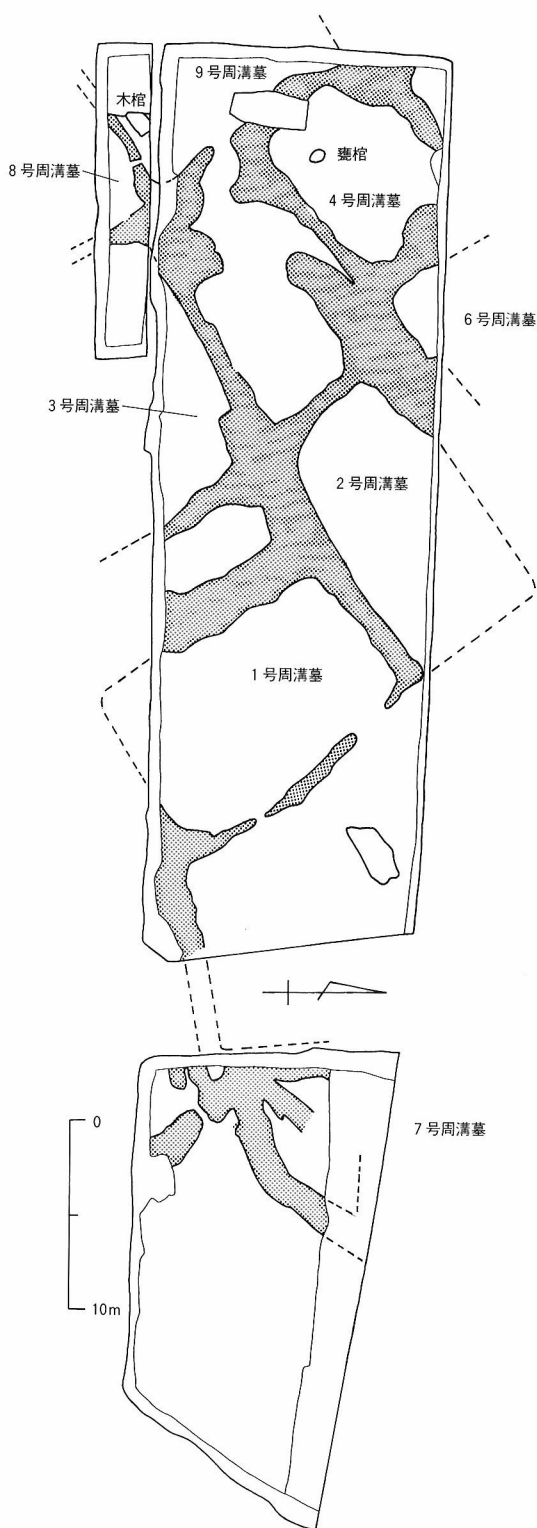


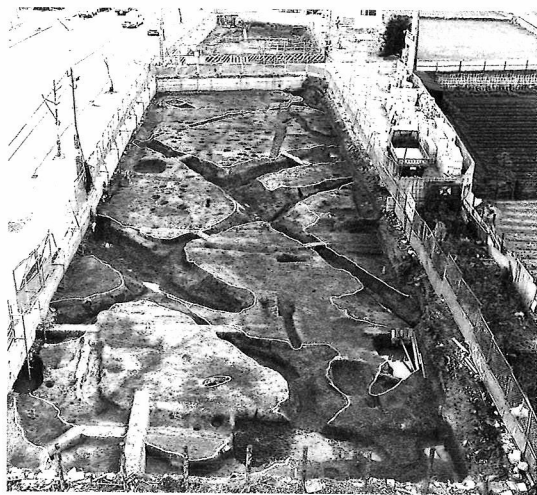
4. 西ノ辻遺跡の方形周溝墓と出土遺物



西ノ辻遺跡の方形周溝墓は、これまで7次調査で7基、26次調査で2基、合計9基確認されている。周溝墓群の北側には、当時大きな谷が横たわっており、谷を挟んで北に2基の方形周溝墓が発見されているが、これは別の集落（植附遺跡か？）のものと考えられている。西ノ辻集落の墓地は、南へ広がると予想されている。

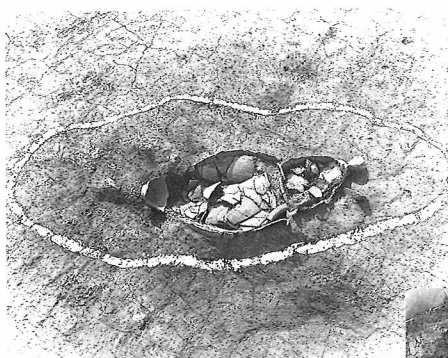
それぞれの周溝墓は、溝を共有あるいは切り合いながら連続して造られている。溝の中には墓前祭祀に使用した土器が大量に遺棄されており、長期間墓域として続いていた様子がうかがわれる。

9基の周溝墓は、後世の整地によって盛土部分が削平されており、主体部はほとんど残っていなかったが、4号墓で小児用と考えられる合口の甕棺1基が検出されたほか、9号墓で木棺1基が検出されている。家族墓としての性格をもった墓地であったことが想像される。（下村）



▲方形周溝墓群全景

◀方形周溝墓配置図

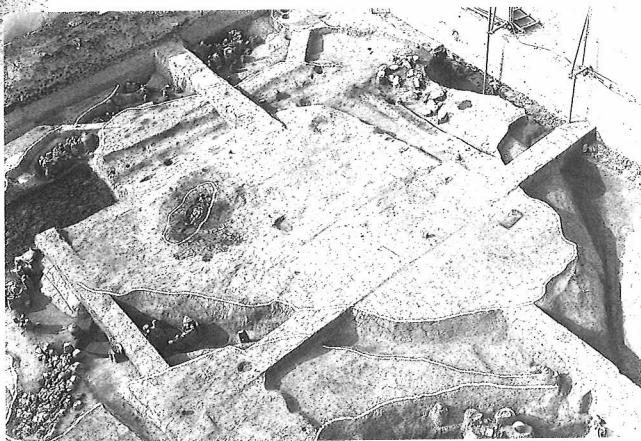


▲小児用合口甕棺

4号方形周溝墓のマウンドの中心から少し南へ下がった位置で検出された。甕棺の墓壙は、長径1m、短径50cmの楕円形を呈し、残存の深さ10cmを測る。大型の甕と中型の甕を合口にして、ほぼ水平に埋葬されている。

▼4号方形周溝墓全景

盛土は削られているが、ほぼ全体の形がわかる周溝墓である。短辺8.0m、長辺10.6mを測り、長方形を呈している。溝の幅は、0.7～1.0m、深さ15～80cmを測る。各コーナは、それぞれ外側に突出して広がり、その部分に土器が多く出土している。



▼7号周溝墓の周溝内土器出土状況

全体の形はわからないが、幅1.5～1.6m、深さ75cmを測る溝が検出された。溝内には5～10cm大に細かく破碎された弥生土器片が、一面に間断なく出土した。土器は、何らかの目的のため人為的に打ち砕いて溝の中に遺棄したものと思われる。



▲5号周溝墓南コーナー土器

出土状況

5号周溝墓は、長辺9m、短辺6.8mの形を呈しているが、その南コーナは、大きく抉れており、その部分から壺・甕・鉢などの完形土器が大量に出土した。完形土器には体部下半に穿孔するものもあり、祭祀用の土器と思われる。



出土遺物

第7次調査では、7基の方形周溝墓から1基の甕棺と、各周溝、土壌内から土器を始め、石器、土製品、鉄器、管玉、獣骨、炭化物が出土した。7次調査地の北側、南西側でも9次、26次調査で方形周溝墓の続きが確認され、26次調査では木棺墓が検出された^{注1}。



▲26次調査出土木棺墓

〈土器〉 土器の出土状況は各周溝毎に少しずつ異なる。1号墓西溝や3号墓北西上層内から完形に近い土器や穿孔を受けたものが、他の土器片の中に並ぶように出土した。1号墓の状況から溝がほぼ埋没する時期に土器が並べられたものと考えられる。3号墓北溝下層内、北西溝では破片が溝全面に散布した状況がみられた。同周溝2層上面では、穿孔を受けた土器と共に出土した破片の中に、頸部のみ残存するものがある。脚部の出土例も各周溝内にみられる。

各周溝内の完形に近い土器には、日常容器のうち、中・小型のものがセットで出土している。中型品には、食卓用の「共用器」と呼ばれる細頸壺・高杯・水差・煮炊き用の甕・壺Dなどがある。大半の土器は底部に穿孔を受け、なかには口縁部が打ち欠かれたものがある。小型品には壺・蓋付き無頸壺・把手付き鉢などがあり、穿孔のないものが多い。中でも、把手付き鉢(コップ)や水差は細頸壺から液体を注ぐ容器として、その出土量も通常では少ないことから祭儀用と考えられており、今回の調査では5点出土している^{注2}。

弥生時代は、中国からの渡来人の生業(道具)、文化、思想(死生感)などの影響をぬきにしては考えられない。少なくとも弥生時代後期まで遡れる「魏志倭人伝」によれば、葬送儀礼に伴って歌舞飲酒する様から、使われた器物がかなりあったことが推測される。また、「魏志」東夷伝によれば、歌舞飲酒は葬送儀礼だけでなく、農耕儀礼にも伴うと記されている。

このような背景を通して、今回の調査の状況をみると、すでに概報でも菅原が述べているが、今まで供献土器と考えられていた土器は、葬送儀礼に伴う歌舞飲酒に使用されたものの蓋然性が高いといえよう^{注3}。田代氏はこのような土器を歌舞飲酒などの葬送儀礼に使用后、「再使用できないように一部を欠いたり、底などに孔をあけて、いわば靈魂の付き代となりえない状態にし廃棄された」もの、更に、小型の完形土器は供献土器かもしれないと述べられたことに合致する^{注4}。また、破片は「土器破碎祭祀」に使われたと考える説の類例にもなるだろう^{注5・6}。これらの土器は、概ね器表面が風化損耗しており、ある期間、風雨に晒されていたことを物語る。

完形の土器には大型の甕があり、内外面にみられる煤付着が葬送儀礼に関するのか、日常時の使用痕なのかは判断ができない。あるいは溝内に埋葬した土器棺であったかもしれない。

4号墓の盛土部の小児棺は、大・中型の甕を合口にして水平に据えたものである。大型甕は「生駒西麓産の胎土」で形態・技法は河内型、中型甕は胎土が異なり、形態は大和型である。前述の土器にも「生駒西麓産の胎土」と異なり、形態・技法が大和、摂津系のものが見られる

▶ 3号墓北西溝内出土弥生土器（7次調査で5号墓南溝内出土としてとりあげた遺物は、26次調査で3号墓北西溝内のものと判明した。）



▼ 3号墓北溝内出土弥生土器
 枠内＝壺・把手付き鉢（現場で盗難にあう）



が、完形品の中には少なく、破片に多く見られる。

1号墓近くの土壌上面では、完形に近い壺Aが正立したままの状態での他の破片と共に出土している。葬送儀礼が行なわれた跡か、祭祀に使用後の廃棄坑の可能性が考えられる。

以上、出土した土器を型式学的に分類すると1・4号墓では第Ⅱ～Ⅳ様式、2号墓では第Ⅱ～Ⅲ(新)、3・5号墓では第Ⅲ(新)～Ⅳ様式、7号墓では第Ⅱ～Ⅲ(古)・Ⅳ様式に比定できる土器が埋葬に関係している。この時期差は、古くて保持期間の長い土器と、新しい土器と一緒に葬送儀礼に使用後、廃棄や供献したためか、後に追葬、祭祀儀礼が行なわれたためかのいずれかによるものと考えられる。



▲ 1号墓周溝内出土弥生土器



◀ 2号墓周溝内出土弥生土器



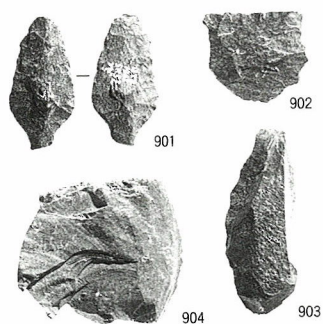
▲ 4号墓周溝内出土弥生土器



▲ 7号墓周溝内出土
弥生土器



▶ 10号周溝・土坑内出土
弥生土器

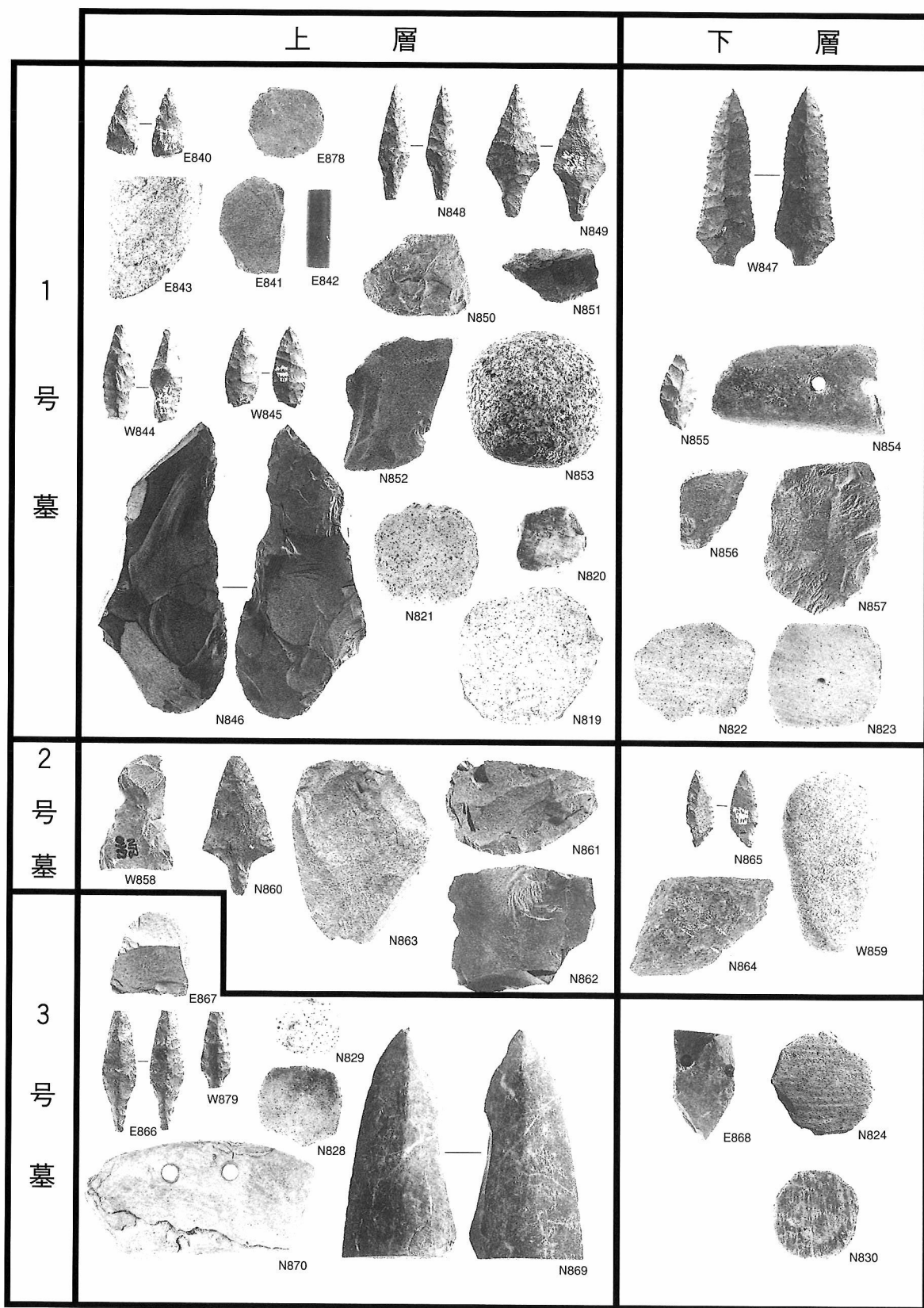


▲ 土坑内出土石器

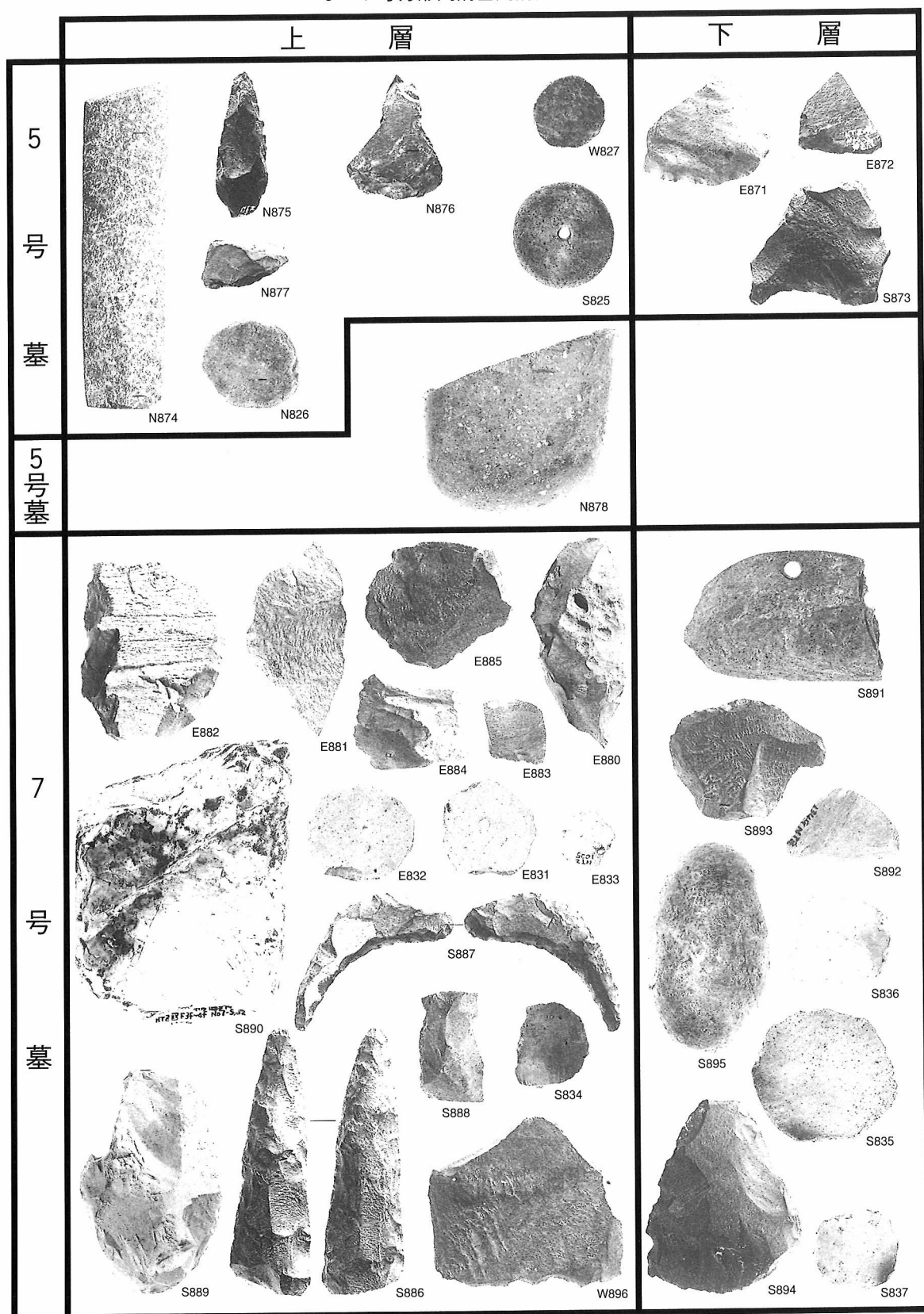


▲ 10号周溝内出土石器

▼ 1 ~ 3 号方形周溝墓周溝内出土石器



▼ 5・7号方形周溝墓周溝内出土石器



＜その他の遺物＞ 各周溝内から土器と共に石器類、土製の紡錘車・円板、管玉などが出土した。石包丁、石斧、石剣などの磨製石器は全形を残すものは少なく、特に石包丁の損耗は激しい。

これらは日常的にかなり使いふるされたものといえる。打製石器では、石鏃は完全なものと、先端部を欠くものが見られ、1点は長さ6.9cmの大型品で完形のまま出土している。石小刀も1点完全なものがある。

中国では、石包丁・石鏃は紡錘車と共に副葬品の中に見られ、また九州地方の弥生時代中期の墓にも鏡・玉・武器などの副葬がみられるが^{注7}、畿内では副葬品そのものが非常に少ない。石包丁の出土状態などを見ると、田代氏が言われるように、他の石器と共に何らかの葬送儀礼に使用したものかもしれない^{注8}。

土製の紡錘車・円板が各周溝内から数点ずつ出土している。瓜生堂遺跡や恩智遺跡では主体部の掘方内にも見られる^{注9}。後の古墳から発見される円板型土製品に通じるものか、魂に呼応しあう玉類として、葬送儀礼に使用された可能性も考えられる。また副葬品としてよく見られる管玉が1号墓東溝内から1点出土している。シルト製のものである。

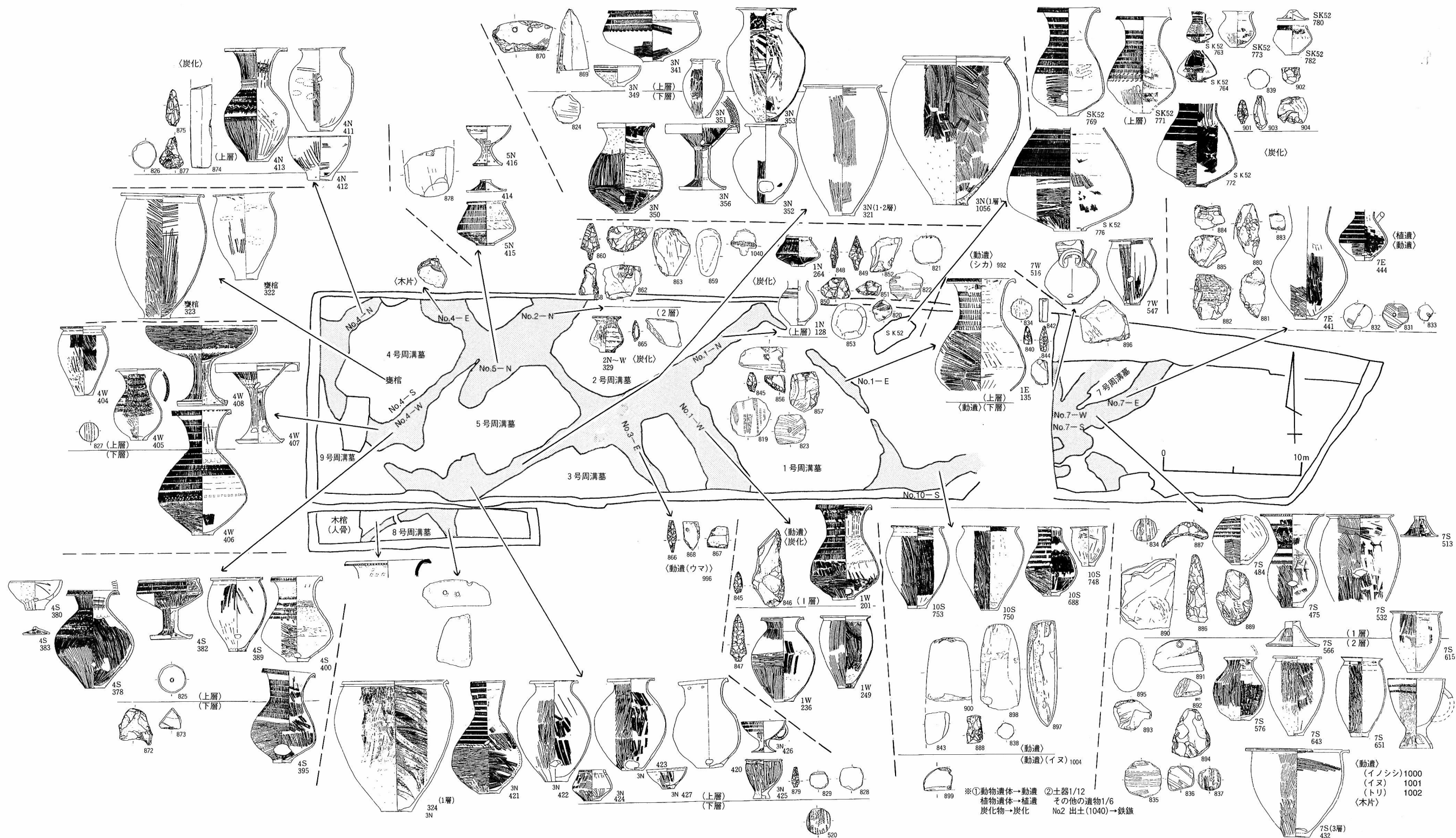
鉄鏃が2号墓北溝内から1点出土した。全体の30%位にあたる先端部を欠く。大澤氏の金属学的調査結果によれば、錆化損傷がひどく国内鍛造品かどうかは不明であるが、原料は大陸産の磁鉄鉱の可能性があり^{注3}。この時期の鉄鏃の出土例は少なく貴重品であっただろう。

動物遺体が出土しているが、遺存状態は悪い。樽野氏に鑑定を依頼したところイノシシ、シカ、イヌ、トリ、ウマなどの獣骨が判明した（ウマは後世のものかもしれない）。これらの遺体が方形周溝墓に関わるかどうかは、弥生時代の動物の扱いを検討する必要があると思われる。シカの角には焼焦げが認められた。鹿は弥生時代の銅鐸や土器絵画によく描かれており、霊獣と考えられていたという説もある^{注10}。中国では犬はよく犠牲にされているが、隣接の鬼虎川遺跡の2号方形周溝墓からは主体部1基と、近くの盛土肩部から犬骨を埋葬した土壌が検出されている^{注11}。またイノシシも祭祀に使用された類例が多い。今回の動物遺体が、これらの類例のようなことが考えられるかどうかは判断できなく、今後の検討課題に残される。

今回の調査では木器の出土例がなく、炭化物が溝内の土層に混じる。鬼虎川・瓜生堂遺跡を始めとする墓域内からよく木製の鋤などが出土している^{注11・12}。炭化物は墓壇の掘削に使用した木製の道具や葬送儀礼に使用した木製容器などを焼成した痕跡などが考えられる。また、後世の葬送儀礼の浄め火や送り火など、先に墓に行った人が火を焚くという風習に繋がるものかもしれない^{注13}。

西ノ辻遺跡の方形周溝墓域から離れた谷筋にも幼児棺（1才未満）の出土例が数例見られる。これは未完成の靈魂に対して、現在の沖縄各地に見られる墓の側に「袖垣」を作って死産児や変死者を埋めて、祖霊化する資格を持たないと考える習俗に似た死生感によるものだろう^{注14}。

以上、今回の調査は中世遺構で削平されて盛土部の状況がわからないが、周溝内の土器などを始め遺物の出土状況は平野部と、また隣接の鬼虎川遺跡とも少しづつ異なり、さらに同一遺跡内でも一様でない。これは弥生時代に中国からの様々な死生感の影響を受け入れつつも、次の古墳時代を築くまで柔軟に変遷していく過程であったと思われる。（曾我）



注・参考文献

- 注1：才原金弘「西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1989年度』財団法人東大阪市文化財協会 1990
- 注2：佐原真「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2) 原始・古代の生産と生活』大塚初垂・戸沢充則・佐原真編 1979
- 注3：『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡』－西ノ辻遺跡第6・7・8次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書－東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1988
- 注4：田代克巳「方形周溝墓」『弥生時代の研究 8 祭と墓と装い』金関 恕・佐原真編集 雄山閣 1987
- 注5：都築暢也・七原恵史他『朝日遺跡Ⅰ～Ⅳ』愛知県教育委員会 1982
- 注6：辻本宗久「弥生時代の墳墓について－大阪湾沿岸地域の資料を中心として－花園史学」花園史学会 1987
- 注7：佐川正敏・青山和夫「中国の石包丁」『考古学ジャーナル3』No260 .1986
- 注8：田代克巳「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『鳥越憲三郎博士古稀記念論文集』1985
- 注9：瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡』、同 1980『恩智遺跡』
- 注10：金関 恕「弥生時代の宗教」『日本考古学論集 3 呪法と祭祀・信仰』1986
- 注11：上野利明・才原金弘『鬼劇川遺跡第12次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1987
- 注12：(財)大阪文化財センター『瓜生堂』1980
- 注13：高山 純「縄文時代人の火に対する信仰」『古代文化』巻8号
- 注14：大島建彦「信仰と年中行事」『日本民俗学大系 7 生活と民俗』1985復刊(『旅と伝説』6の7)